ヒミコと呼ばれる女

富岡多恵子

ヒミコと呼ばれる女

富岡多恵子

ヒミコと呼ばれる女

富岡多恵子

ヒミコと呼ばれる女　定価六〇〇円　著者　富岡多恵子

昭和四九年一月二〇日発行　昭和四九年四月二五日二刷

発行者　佐藤亮一　発行所　新潮社　〒一六二　東京都新宿区矢来町七一
振替八〇八電話〇三―二六〇―一一一一

印刷所　株式会社金羊社　製本所　植木製本

© Taeko Tomioka, 1974 Printed in Japan
乱丁、落丁本はおとりかえいたします。

目次

〈シナリオ〉卑弥呼　5
〈小説〉ヒミコと呼ばれる女　87
〈エッセイ〉映像のための言語——体験的に——　129
あとがき　161

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ヒミコと呼ばれる女

〈シナリオ〉

卑弥呼

■主な登場人物

ヒミコ

タケヒコ

アダヒメ

オオキミ

キサキ

ミマキ

イクメ

ナシメ

トヨ

1　タイトル

2　銅鐸の発掘

山のふもとの平地で、ひとりの男が土を掘っている。
他にはだれもいない。
土から銅鐸(どうたく)があらわれる。
土を掘っていた若い男が驚いて、その銅鐸に触れる。
その男は落着きを失っている。
土の上に掘り出された銅鐸。

銅鐸の前で、若い男はあちこちを見まわす。

十数人の、同じ装束をした男たちがあらわれて、若い男を押えて、捕える。捕えられた若い男が、銅鐸の方を見ながら、〈タケヒコが帰った！〉と低く呻くように叫んでいる。

人間や動物植物、家屋や水や舟、その他農耕の様子などを線描した銅鐸の模様。

その銅鐸の穴から、平地と山が見え、夕日の沈む景色がひろがる。

光の世界と闇の世界の狭間の時間。政事（まつりごと）と祭事の時間から、人間の闇の世界へ移りゆくまえぶれの風景である。

3　国ツ神を祭るひとびと

鹿の大きな頭（かしら）をつけた農民たちの踊り。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

水や木にやどる神を祭る農民たち。
田に山から神を迎えて祭る農民たち。
さまざまな、農耕者たちの神祭りの様子がアッサンブラージュ風に見せられる。

一方、土地の神を祭り鎮める祭（都会の地鎮祭）、カマドの前に祭られる神（地方の民家）、神社の祭礼、縁組み、金儲け、災難よけ、安産、その他いろいろなご利益をセールス・ポイントにする現代の神社、寺も見せられる。

4　歌垣の夜

大勢の農民たちがにぎやかに集っている。
その中の数十人の若者が、山の神や山姥に扮して、群舞が行われている。
群舞が終ると、ひとびとは踊っていた若者たちが身につけていたものを競って奪い合う。（榊、杖、弓、剣、鉾など）

農民たちは、あちこちで、持参の酒を酌み交している。持参の食べものと、山の神の踊り手から奪った品物を交換しているものもある。
酒がまわるにつれて、ひとびとの声が高くなり、笑い声があちこちでひろがる。

また、あちこちで男と女の一組ができ、ふざけあっている。

酒を飲む農民たちの間に、タケヒコの姿が見える。
月の光が、タケヒコの顔を時々はっきりとうつし出す。
若い男と女の組が、ひとびとの群から離れて、立ち去るのもある。

農民の中の、おそらく豪族の長(おさ)と思われる男のまわりには、自然と多くの農民が集って、酒を飲みながら喋っている。

農民A「銅鐸を見つけただけで殺されたか」
農民B「今、だれもその銅鐸をつくる者はいないというのに」
農民C「山の神のタタリがおそろしいのだろう、あのひとたちには」

農民D「山の神を祭らぬ者に、それはわからぬ」

農民たちの会話を遠くから注意して聴くタケヒコ。

押問答のように、いいあいをしている若い男女。多分、かけあいをしているのであろうが、たわむれているように見える。

豪族の長がタケヒコのいるのを知る。

農民A「銅鐸を見つけただけで殺されていては、かなわない」

農民B「あのひとたちに、山の神のことはわからぬ」

農民C「われらが集まり、群をつくればどうなるのか——」

豪族の長が少し離れた所にいるタケヒコをその酒の座に招く。

タケヒコはそれに応じないで、坐ったまま。

長がタケヒコに近づいていく。

5　ヒミコの部屋

開放的な感じの空間で、手前に二本の柱が見えるが、奥行きはあまりない。地べたでなく床がある。
機(はた)が見える。イザリ機であるがかなり大きく、そこには織りかけの白い布がさがっている。

琴が見える。
それから数枚の鏡が置かれているのが見える。
他には、素焼の壺ぐらいで、日常の生活具は見えない。
簡素な、がらんとした感じがしている。

ヒミコは部屋の中央に坐っている。ヒミコは若くない。三十五、六歳というところか。しかし、おそらく、ヒミコの一族にあっては、もう少し年配の感じに扱われているように思われる。

部屋の中に坐っているヒミコは、いわばそこにいても、なにか、日常的な人間になりきらぬふうなところがその坐っている姿勢からだけでもよみとれる。
ヒミコから少し離れて、アダヒメが坐っている。
アダヒメは、ヒミコよりもはるかに若く、おそらく十代の終りの年齢である。アダヒメは、ヒミコよりも打ちとけた様子で坐っている。

ヒミコは無言のまま立ち上がる。
そのヒミコを見上げるアダヒメ。
ヒミコは機の方へいき、機の前に坐る。

アダヒメ「それは神にささげる布――」
ヒミコ「そうです、これは神にささげる布です」

ヒミコはアダヒメの方へはじめて顔を向ける。

ヒミコ「日の神が隠れ、闇がおとずれると、わたしはいつもここにいます」
アダヒメ「そして神にささげる布を――」

ヒミコ「いいえ、闇ではなく、日の神の光で。ただ、闇の中でも、わたしは神の布を織ることもあります」

ヒミコは機から布をひき出し、それを手でひろげて眺める。

アダヒメ「タケヒコが、この土地に戻ってきたという噂が聞えます」
ヒミコ「ああ、タケヒコが」
アダヒメ「それはただ、噂だけ――」
ヒミコ「思えば、タケヒコはまだ幼い時にどこかへ旅立って、あちらこちらと旅をしているということでした」
アダヒメ「もしも、その噂がまことなら、オオキミもよろこばれましょう」
ヒミコ「タケヒコは、どのようなクニを旅してきたのでしょう。アダヒメ、あなたもこの土地へくるまでは旅をしていたとか」
アダヒメ「わたしはただ――。タケヒコのことはただの噂ですから」

アダヒメには、どこか、単にタケヒコの帰還を告げるだけで、その他のことには触れたがらぬ態度が見える。
ヒミコも、あまり熱心な関心をタケヒコに示していない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com